

# 長崎市民の「平和宣言」

○口と長崎市が開いた平和記念式典での鈴木安朗市長の「長崎平和宣言」全文は次の通りです。

◇  
「突然、背後から虹のよう光が目と映り、強烈な爆風で吹き飛ばされ、道路にたたきつけられました。背中に手を当てると、着ていた物は何もなく、ヌルヌルと焼けただれた皮膚がべつとり付いてきました。3年7ヶ月の病院生活、そのうちの1年9ヶ月は背中一面大やけどのため、うつぶせのままで死の淵をさまよいました。私の胸は床ずれで骨まで腐りました。今まで死の淵をさまよいました。

谷口さんは6年前との世を去りましたが、生前、まさに今の世界を予見したかのような次の言葉を述べました。「過去の苦しみなど忘れて、去られつつあるように見えます。私はその忘却を恐れ



〔長崎平和宣言〕おひぐる鈴木安朗市長=1990年10月、長崎市内

ます。忘却が新しい原爆で定へと流れてしまうことを恐れます」

も胸は深くえぐり取ったようになり、肋骨の間から心臓の動いているのが見えます」

これは16歳で被爆し、背中に真っ赤な大やけどを負った谷口稜壁（すみてる）さんが語った体験です。

1945年8月の日午前11時2分、長崎の上空で破裂（さくれつ）した1発の原子爆弾により、その年のうちに7万4千人の命が奪われました。生き延びた被爆者も、数年後、数十年後に白血病やがんなどを発症し、放射線の影響による苦しみや不安を今なお抱えています。

谷口さんは6年前との世を去りましたが、生前、まさに今の世界を予見したかのような次の言葉を述べました。「過去の苦しみなど忘れて、去られつつあるように見えます。私はその忘却を恐れ

攻の中で、ロシアは核兵器による威嚇を続けています。他の核保有国でも核兵器への依存を強める動きや、核戦力を増強する動きが加速し、核戦争の危機が一段と高まっています。

今、私たちに何が必要なのでしょうか。

「78年前に原子爆の下で人間に何が起つたのか」という原点に立ち返り、「今、核戦争が始まっている」が、核兵器のない世界を実現するには、地球から核兵器をなくさなければならないのです。

今こそ、核抑止への依存からの脱却を勇気を持って決断すべきです。人間を中心据えた安全保障の考え方など、対決ではなく対話を通じて核兵器廃絶への道を着実に歩むよう求めます。

今年5月のO7・広島サミットでは、参加各国リーダーがそろって広島平和記念資料館を訪れ、被爆者と面会し、被爆の実相を知ることの重要性を自らの行動で示しました。また、このサミットの成果文書である「核軍縮に関するO7

い」としてこれが再確認されました。しかし、この状況ビジョンは、核兵器を持つことでの安全を守るために「核抑止」を前提としています。核抑止の危うさはロシアだけではありません。

核抑止に依存していくには、核兵器のない世界を実現するには、地球から核兵器をなくさなければならないのです。私は、西親ともに被爆者である被爆2世です。「長崎を最後の被爆地にするため、私を含めた次の世代が被爆者の思いをしっかりと受け継ぎ、平和のバトンを未来につないでいきます」

た。この訴えこそが、78年間、核兵器を使わせなかつた「抑止力」となってきたのです。その被爆者の平均年齢は、今年85歳を超える代を迎えようとしている。その被爆者の平均年齢は、今年85歳を超えた。被爆者がいなくなる時代を迎えるようとしているのです。その被爆者の平均年齢は、今年85歳を超えた。被爆者がいなくなる時代を迎えるようとしているのです。その被爆者の平均年齢は、今年85歳を超えた。被爆者がいなくなる時代を迎えるようとしているのです。

日本政府には、被爆者援護のための充実と一日も早い被爆体験者の救済を強く求めます。

原子爆弾により「ひなられた方々に心から慰撫の意をささげるとともに、長崎市にこの本当の意味の中、「抑止力」をこれからも持ち続けられるか、そして核兵器を廃絶できるかは、私たち一人ひとりの行動にかかると思います。

被爆地を訪れ、核兵器による結果を自分の目で見て、感じてください。もし

て、世界中で語り継ぐべき人類共通の遺産ともいえる被爆者の体験に耳を傾けてください。

（以下略）